

ハイデルベルク大学主催の国際会議に出席して

川戸道昭

昨年11月、ドイツ・ハイデルベルク大学の日本研究科のアロカイ（Judit Árokay）教授から突然一通の電子メールをいただいた。見れば、2011年7月に同大学で国際会議を開催するので参加しないかとの誘いのメールである。会議のテーマは、“Linguistic Awareness and Dissolution of Diglossia”とある。それにしても、「diglossia（2言語変種使い分け）」などという、およそこちらの研究課題と縁のなさそうなテーマの国際会議になぜ私が誘われなければならないのか。そう思って、そこに添えられている会議の趣旨説明を読んでもみると、こんなことが記されていた。

ハイデルベルク大学では、“Excellence Initiative”と銘打った大学研究・教育の拠点化と質の向上を目指す国家プロジェクト（日本の「21世紀COEプログラム」に相当）に、「世界文脈の中のアジアとヨーロッパ、文化流入における変容する非対称（Asia and Europe in a Global Context: Shifting Asymmetries in Cultural Flows）」と題するプログラムが採択され、今回の会議はこのプログラムを実行・運営する研究チームの1つが開催するものである。同チームでは、これまで、「近代文章語の出現過程における変化の諸相」という統一テーマのもとに、とくに日本の「言文一致」運動における言語・文化上の変化のプロセスを、東ヨーロッパの国々で起こった変化と比較・検証するというを中心に研究活動を行ってきた。その最終段階として、同テーマについてさらに世界的なコンテクストから議論を深めるべく開催されるのが今回の国際会議である。この趣旨をご理解の上、貴君にも、是非発表者の一人として会議に参加していただきたい、と。

これを読んで私の疑問は氷解した。思うに、会議のテーマは、これまでどおり日本の「言文一致」運動ということで、変わりはないのだろう。ただ、それだけでは世界的な広がりや欠くので、そこに“diglossia”という社会言語学上の概念を採り入れて、世界の研究者が参加しやすく調整し直したのではないか。そう思って、改めて会議の趣旨を精読してみると、そこには、はっきりと、「今回の会議は日本の言文一致のプロセスと他のアジアやヨーロッパ言語のプロセスと比較することを目的とする」と明記されている。これならば社会言語学と縁のない、明治期の翻訳文学を専門とする私にも参加可能なテーマではないかと思われる。そう考えて、私は、このオファーを受けすることにした。

実際、会議の参加予定者を見ると、日本からは、私ともう一人、一橋大学大学院言語社会研究科のイ・ヨンスク（李妍淑）教授の名前がみえる。つまり、“diglossia”はイ先生に任せて、私の方は、明治翻訳文学の方に専念すればいいというわけだ。そもそも、私にこの招待状を下さったハイデルベルク大学のアロカイ教授は、以前私の勤め先の中央大学で翻訳文学に関する国際シンポジウムが開かれたときに、そこに参加していなかった私の研究室までわざわざ訪ねてくださった方である。つまり、私が翻訳文学の研究者であることを最初から知っていた。となると、私に求められる研究発

表のテーマは自ずと限定されてくる。すなわち、「言文一致と19世紀後半の翻訳文学」、これ以外に私の担うべきテーマはない。

そのように考えて、テーマを「言文一致と19世紀後半の翻訳文学」と定めてその発表の要旨を送ったところ、果たせるかな、会議のひと月前に送られてきたプログラムをみると、第1日目が「ダイグロシア、過去と現在 (Diglossia past and present)」、2日目が「言語上の変化への覚醒と翻訳の役割 (Awareness of Linguistic Change and the Role of Translation)」と分けられ、私の発表は2日目の方に入っていた。一橋大学大学院のイ・ヨンスク先生はむろん1日目の方で、シェフィールド大学の Neil Bermel 教授、ウエスト・ワシントン大学の Massimiliano Tomasi 教授、カーネギーメロン大学の Elisabeth Kaske 准教授、サンフランシスコ州立大学の Chris Wen-Chao Li 准教授ら7名の中に名前が記されていた。一方、2日目の方にあげられているのは、ハイデルベルク大学の Judit Árokay 教授、UCLA の Olga Yokoyama 教授、ウエスト・ミシガン大学の Jeffrey Angles 准教授ら7名で、私の名前はその4番目、すなわち午前中の部の最後のところに記されていた。

これら14名の研究者が2日に分けて研究を発表しそれについて質疑応答をするというのが会議の主な内容であるが、このプログラムを見て一つ気になったのは、1日に7人も研究者が発表と質疑応答をくりかえすという大変ハードなスケジュールとなっていることである。各自の持ち時間が1時間ということだから(発表45分・質疑応答15分)、それを7回繰り返したあと、ようやく最終討論に入ることになり、会議だけで正味8、9時間、昼食時間まで含めると合計10時間にもおよぶ大変ハードなスケジュールである。

本当にそのとおりに事が進むのかと半信半疑であったが、実際に会議に臨んでみると心配などどこ吹く風で、熱の籠もった発表と丁々発止の議論が延々7時間続いて、さらに最終討論に2時間が費やされ、ようやく会議終了となったときにはすでに夜の7時を回っていた。さらに、それが終わると、1時間後に近くのビヤホールに集合ということになって、今度は形式にこだわらないざっくばらんな情報交換が2時間3時間と続くという具合で、文字通り議論づけの2日間となった。

なんとまあ討論好きな人びとかというのが、誰も懐く率直な感想であろう。普段ならこんな会議は断固御免こうむるところだが、不思議なことにこのときばかりはさしたる苦もなくあつという間に時間が過ぎていった。思うに、話の中身がこれまで私が20数年にわたって研究の対象としてきた翻訳文学であったということが大きく影響していたのだろう。あるいは、はるか昔、学生時代に読んだマイヤーフェルスターの戯曲『アルト・ハイデルベルク』の感傷的な物語の記憶がハードなスケジュールを忘れさせる上でなんらかの効果を及ぼしたのかもしれない。それにしても、夢見る頃をはるかに過ぎたこの年になって、美しい古城の見下ろすドイツ最古のこの大学街で世界の研究者を相手に議論に花を咲かせるなど想像だにできなかった。学生や若き研究者たちであふれかえる大ホールで、とびきり美味しいビールとソーセージを賞味しながら、そんな感傷的な思いがふと脳裏をよぎった。ホールを出て、イ・ヨンスク先生、Wen-Chao Li 先生とともに、心地よい夏の涼風を酔顔に受けながら、古城にそって縦

長に伸びるハイデルベルクの街を歩きつ戻りつようやく宿舍にたどりついたときには、時すでに深更におよんでいた。

以上が2日間におよぶ会議の進行経過だが、実際にそこで行われた議論の内容については、目下それをまとめて1冊の本にしようという計画が進行中で、詳しい内容はそちらに譲る。ここでは、参考までに、日本文学に関連するテーマを扱った発表について簡単に紹介しておく。ハイデルベルク大学のアロカイ先生が、江戸期の詩の序文にみられる「言文一致」の兆候について、ウエスト・ワシントン大学の Tomasi 先生が、日本の明治期とイタリア・ルネッサンス期の新たな文章語を求める動きにおける類似点と相違点について、ウエスト・ミシガン大学の Angles 先生が、明治期の翻訳文学の言語的・文化的背景について、それぞれ独自の立場から興味深い論を展開された。これら3人のうち英語を母語とするのは、Angles 先生一人で、あとの二人はそれぞれハンガリー、イタリアのご出身。要するに、今回の会議の特徴の一つは、出席者の大半が非英語圏の東アジアやヨーロッパの出身で、その人たちが英語を使って、日本の「言文一致」をはじめとする「近代文章語の出現過程における変化の諸相」を議論し合うところにあったといえる。当会議の出席者で、ハイデルベルク大学で PhD を取得された Kaske 先生の情報によると、ドイツでは理工系の論文はほぼ 100 パーセント、文系でも 70 パーセント程度は、英語で書かれるとのことで、今後世界はますますこの方向に向かって進んでいくように思われる。私のような者が、世界の研究者を相手に、英語で、日本の「言文一致」について論じ合うこと自体、すでにその端的な現われとみていいのだろう。ともあれ、今回の会議は、私にとって、世界各地で同じ分野の研究を行う人びととの貴重な情報交換の場となると同時に、私自身のこれまでの研究姿勢が国内のことにだけ目を向けたあまりにも内向きな姿勢であったことに改めて気づかされる貴重な自己確認の場ともなった。やはり、これからは世界に目を向けた広い視野に立った研究を行っていかねばならないと痛感した次第。

最後に、この場を借りて、今回の会議の発表をまとめた研究論文の Abstract を紹介させていただくことにする。タイトルの日本語訳は「言文一致と 19 世紀後半の翻訳文学」というものだが、それだけでは問題が大きすぎて焦点が定まらないので、そこに「である文の成立に果たした翻訳文学の役割」という視点を設けて、事の本質を絞りこめるようにした。内容もさることながら、英文のつたなさに関しては改めて断るまでもないだろう。それを承知の上で、あえてこれを公表するのは、これまでのあまりにも内向きな姿勢への私なりの反省がこめられているとご理解いただければ幸いである。

***Genbun-itchi* and Literary Translations in Later 19th Century Japan: The Role of Literary Translations in Forming the “De-aru” Style**

In late 19th century Japan, a group of literary pioneers launched the so-called *genbun-itchi* (言文一致) movement. Although *genbun-itchi* literally means “unification of the written and spoken language”, the real objective of the group

was to create a new Japanese writing style based on European languages so they could write new European-style novels. Therefore, most advocates of the movement produced literal translations of European novels. However, experts who have studied how the movement shaped a new style tend to focus too much on the movement's original works and too little on its translations. As a result, they sometimes fail to grasp some of the essential points of the movement.

One of the most conspicuous examples is the use of “de-arū” at the end of sentences, which is essential to the modern writing style. Without taking translations into consideration, one cannot understand the process of how the word came into existence. For example, the sentence “He is a poor workman” was easily translated into old written Japanese like ‘Kare wa mazushiki yōfu nari’ (彼は貧しき傭夫なり) by Morita Shiken (森田思軒 1861-1897). However, translating the same sentence into the vernacular would require changing it to something too polite (or honorific) like ‘Kare wa mazushii yōfu desu’ (彼は貧しい傭夫です) or something too rude like ‘Kare wa mazushii yōfu da’ (彼は貧しい傭夫だ). Relying only on the vernacular, they could not translate the sentence into Japanese because the vernacular lacked the equivalent for the English verb “be”. To create a new style based on European languages, they had to devise a word that mediates between “desu” and “da”.

Thus they set an eye on the word “de-arū” which was largely used in the word-for-word translations of European language textbooks. They knew the word was unfamiliar and even harsh to their ears but they had no choice but to introduce the word because it proved indispensable to the *genbun-itchi* style. As it did not contain any honorific meaning, it was suitable for stories told in the third person through narrators who kept a distance from the characters and described situations objectively. In other words, it was indispensable to the European-style novels that they aimed to create. Futabatei Shimei (二葉亭四迷 1864-1909), one of the pioneers of the new style, suggested it should continue to be used however harsh it might sound. He said “If we use “de-arū”, “de-atta” and “darō” for 100 or 200 years, they might sound familiar and pleasant to our ears”.

This shows that the success or failure of the *genbun-itchi* style largely depended on whether the word “de-arū” and its variant forms “de-atta”, “de-arō” and “de-attarō” were accepted by the public. In other words, the history of the new style can be traced through the process of these words being introduced and accepted.

Thus, in this paper, I focus on these words and scrutinize the process of how they were introduced by the advocates of the *genbun-itchi* movement and were extended to various forms of written communication before they finally came to be regarded as essential to the modern style.